

近世城下町における寺院の配置の変遷に関する研究

— 金沢城下町を事例にして —

原 田 歩

(2024年10月9日受理)

A Study of Changes in the Layout of Temples in Early Modern Castle Towns:
A Case Study of Kanazawa Castle Town

Ayumu Harada

Abstract: The purpose of this paper is to clarify the urban planning by the Kanazawa feudal lord regarding the placement of temples. In the modern times, the feudal lords promoted urban development, including temples. However, it's not clear how the clan leaders planned to place the temples in the city. To this end, a temple distribution map was created for each clan leader's reign, and the types of changes in temples were examined. The layout of temples in early modern castle towns has been discussed with a focus on temple clusters, such as the temple area found in each castle town. Most of them point out that the purpose of temple concentrations was military. However, there are some problems with these arguments, such as the fact that they do not take into account temples outside of the temple agglomeration areas, and the fact that they do not take into account the period when the temples were established. The following two points can be pointed out as results of this study. First, it showed that there was a significant difference between the two temple clusters in terms of when they were established. Second, it points out the role of the temple agglomerations at the entrances to the roads. Although it was previously explained in terms of a defensive function, we pointed out that the timing of its establishment and the appearance of the temple cluster suggest that it was not a defensive function. By looking at the layout of temples by clan leader's reign, this study points out the discrepancies in the timing of the establishment of temple clusters and the inconsistencies when considered from a defensive perspective.

Key words: Early modern castle town, temple layout, urban planning, historical geography

キーワード：近世城下町，寺院配置，都市計画，歴史地理

1. はじめに

本稿の目的は、金沢城下町における寺院分布を藩主の治世別に示すことで、各藩主の寺院配置に関わる都市計画の特徴を明らかにすることである。都市計画者である藩主によって行われる城下町の整備は、絵図などを基に当時の都市空間を復原し、その「空間」の意義を考察する歴史地理学において、研究がなされてき

た。矢守(1988)の「横町型・縦町型プラン」や中西(2003)の「秀吉系・徳川系城下町」においても、藩主の属性による違いから説明された。また、広島城下町のように藩主の交代によって「縦町型プラン」から「横町型プラン」に変わる事例からも城下町計画における藩主の影響の大きさが分かる(今川ら, 2009)。

近世城下町における寺院配置は、寺町を代表とした寺院集積地^①を中心に歴史地理学の分野で研究対象となってきた。城下町プランの変遷を検討した松本(1967)や矢守(1988)においても議論の対象は寺

本論文は、査読付き論文である。

院集積地であった。そして、その多くは寺院集積地の設置目的が有事に城下町を守るという軍事的な機能にあると指摘する。広い空間を持つ境内や建築物に兵力を配置可能なこと（小野，1934）や、境内にある墓石が石垣や土塁の石材として転用可能であるとされている。しかし、寺院が設置の背景に軍事目的があったことを示す史料の言及はなく、侍町や町人町の配置変化は時代や複数の城下町をまたいだ差異が検討されているものの、寺院は軍事目的という結論が踏襲されている。

城下町の防衛的機能に関する言及は、戦前の小野（1934）の研究成果にみられる。特に寺院配置に関する類型では、集团的様式と散在的様式を指摘し、各城郭との関係から防衛的機能の違いを説明した。また、城下の街道の入り口の要所においても寺院が防衛的機能を担っていることを指摘した。この指摘はその後も継承され、原田（1983）では三都における寺院門前町の発達について新たな寺院の役割を指摘したが、地方城下町の寺町や寺院集積地に関しては小野の説を踏襲している。小野の指摘は寺院集積地に新たな役割を見出そうとした試みとして評価できる。

こうした議論に対して、中西（1998）は、城下町の軍事施設の報告を目的とした正保城絵図に寺院表記の規定が見られないことから問題提起を行っている。

また、松本（2013）は金沢や福井の事例に注目し中世の寺院が持つ地域的特性を考慮して城下町形成と寺院配置を分析し、さらに伊藤（1992）の近世寺院の三類型にも言及した点で注目されるが、寺町については防衛的機能の指摘に留まっている。

この指摘には次のような課題がある。まず、寺院集積地に属さない寺院は分析の対象になっていない。次に、寺院集積地が成立した時期についての言及がない。寺院配置は城下町整備期や藩主の交代の時期に変化がみられる。その一方、寺院配置の分析では、城下町整備後の絵図を用いており、寺院配置の時系列は考慮されていない。最後に、寺院の属性について、防衛機能を担うとされる広大な寺領を持つ寺院の中には藩主や家臣と菩提寺や祈禱所としての深いつながりを持つ寺院がある。そうした寺院に防衛機能をもたせることには疑問が生じるのに加えて、寺院周辺の防御を担う構造物（塀や堀など）についても検証されていない。

そこで、本研究では歴史地理学的手法を用いて金沢城下町を事例に、その寺院配置を藩主別に捉えることで、各藩主の治世期における寺院配置の意図を考察し、従来指摘されてきた防衛的機能がみられるか検証する。

本研究では、『金沢古蹟志』を活用して、寺院の来

歴を整理し、絵図で位置を特定しながら藩主の治世期別に整理することで、寺院群の成立の様子から藩主の配置意図を明らかにする。『金沢古蹟志』は森田平次によって明治24年に書かれた金沢城下の町名・寺院・人名などを詳細に考証したもので、金沢城下の寺院分析に利用されてきた。なお、本稿では寺院配置が盛んに行われた1596～1723年（前田利家の治世から5代藩主前田綱紀の治世）を対象とする。

2. 金沢城下町について

金沢城下町は絵図によると寛文・延寶期（1661～80）には形成を終えていたと考えられている（金沢市，2005）。武家地の改変は1611（慶長16）年の越中高岡からの藩士の流入と1658（万治元）年と翌年の小松在住藩士の移動の2回が指摘され、1696（元禄9）年の兼六園の整備などによっても城下町の構成は変化した。

金沢城下町の寺院立地の特徴として、3つの寺院群が指摘できる。小立野寺院群、卯辰山寺院群、寺町寺院群がみられ、卯辰山寺院群が北東部に、それと向き合う形で寺町寺院群がある（図1）。



図1 1668（寛文8年）金沢城下区分図
（金沢市（2005）より引用）

これらは北国街道の入り口に整備されており、従来指摘されている「城下の街道の入り口の要所」に位置しているといえる。さらに、小立野寺院群は南東部に位置している。これらの寺院群には城下町内の全寺院の65%にあたる寺院が集中配置されており、金沢城下町の寺院を語るうえで非常に重要な存在であるといえ

る。『金沢市史』では、寺院群について全国一般的に軍事的機能があることを指摘し、金沢においても同様の指摘がある事をあげつつも、成立時期のずれなどから城下の空間利用区分・都市整備にあったと指摘している。また、こうした寺院群は最初から整備されたものではなく、宝永期（18世紀初）に記された『三壺問書』によれば、城下町整備初期には河原町付近と大手町・中町付近に寺院集積地がつくられていたと書かれている。

以上のように、顕著な寺院集積地のある金沢はその寺院配置について議論がなされてきた。『三壺問書』の記述を根拠にした田中（1977）は、特に小立野寺院群がある場所は、天守と地続きになっている台地であり、天徳院・宝円寺を置いて防御を固めたと指摘した。この指摘は戦前からあり他の寺院群も軍事的機能で論じられるようになった。加えて、真宗寺院が寺院群に位置していないことも指摘し、一向宗を他の宗派が監視するようなシステムを取っていたとした。外部の軍事的勢力や宗教勢力から城下を守るための都市計画がなされたと理解している。

それに対し、日置は『石川県史』において前田家の軍事的優位性と平山城が軍事的機能より経済的機能を有していたことを鑑み、城下の防衛的機能は支城や周囲の河川などに任せていたことを指摘し、城下の寺院に関しては、その軍事的効果について言及しなかった（石川県、1974）。

さらに木越（2018）は小立野寺院群に注目し、小立野寺院群は1つの寺院群として捉えるのではなく、3つの小寺院群と町中分散寺院の集合体と捉えることを提案した。これは寺院群を一面的に捉えるのではなく、個別事例を分析的に取り扱った新しい提案であった。

3. 前田利家・利長の治世

小牧・長久手の戦いを経て、1584（天正12）年金沢城築城に向けた人足を徴発した前田利家により本格的な近世城下町の整備が始まった。各藩主の寺院配置数と城下における寺院移転数は以下のとおりである（表1、表2）。

表1をみると城下町整備が始まった利家の治世には幅広い宗派の寺院が建立されていることが分かる。それに加え、利長の治世では曹洞宗や法華宗、浄土宗を中心とした寺院が多数おかれていることが分かる。利長の治世は、武家地の改変が行われた時代でもあり、武家地の改変が行われた1611（慶長16）年と1658（万治元）年を含む利常と綱紀の治世には城下町内で多くの寺院移転が行われていることが分かる。その一方で、

4代光高の治世では、寺院の建立がほとんど見られない。利常隠居後から5代綱紀が金沢に入国するまでの約20年間藩主不在状態に陥り、城下町の整備が進められなかったこと（金沢市、2005）が背景にある。このことは、城下町整備と寺院配置が同時進行で進められていたことを示している。

表1 藩主別にみた宗派別寺院建立数

| 宗派\藩主 | 利家 | 利長 | 利常 | 光高 | 綱紀 |
|-------|----|----|----|----|----|
| 天台宗 | 2 | | | | |
| 真言宗 | 2 | 1 | 3 | | 1 |
| 曹洞宗 | 9 | 3 | 12 | 1 | 6 |
| 臨済宗 | 1 | | 4 | | |
| 浄土宗 | 3 | 2 | 10 | 2 | 2 |
| 法華宗 | 4 | 2 | 12 | | 5 |
| 真宗西派 | | | | | |
| 真宗東派 | 3 | 3 | 2 | | 1 |
| 計 | 24 | 11 | 43 | 3 | 15 |

（『金沢古蹟志』をもとに筆者作成）

表2 城下内での寺院移転数

| | 利家 | 利長 | 利常 | 光高 | 綱紀 |
|-----|----|----|----|----|----|
| 寺院数 | 0 | 0 | 14 | 0 | 18 |

（『金沢古蹟志』をもとに筆者作成）

まず、前田利家の治世では、卯辰山寺院群に寺院配置がみられる一方で、寺町寺院群への寺院配置はまばらである。防衛的機能の観点からいうと寺町寺院群が親藩の藩格をもつ越前松平家の支配する福井に通じる街道の入り口にあたる場所である。また、小立野寺院群では絵図によると台地の崖下に配置された寺院が多く、台地上への移転はほとんど見られない。寺院群以外の寺院に関しては、堀之内川である城下の中心部に近い位置に寺院がみられることが特徴である。

利家の治世の城下町整備は、主に城下町の内堀や外堀とその周辺の施設の整備が行われていた（金沢市、2005）。1586（天正14）年に天守閣が完成するなど城下町全体の整備に追われていたと考えられる。そのような中で、卯辰山寺院群が3寺院群の中で最初に整備が考えられていたことが分かる。卯辰山寺院群には徳川の位牌所である如来寺も置かれたことから、重要な寺院集積地と捉えていたと考えられる（図2）。

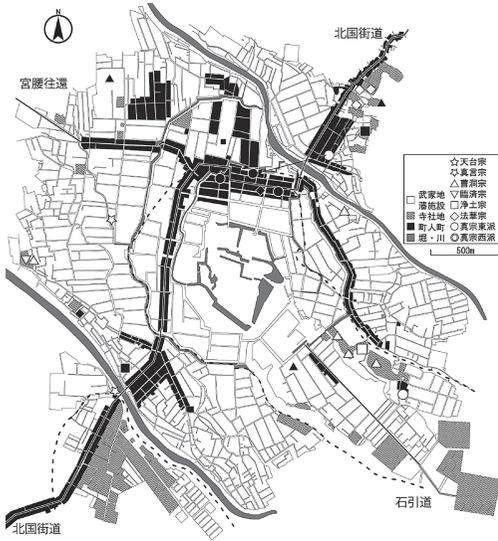


図2 前田利家の治世の寺院配置
(寛文七年金沢図 1673年)

- * 移転前の地域までしか特定できなかった寺院は黒塗りで示している。
- * 破線は段丘と扇状地の境界を示しており、いずれも破線より南東が段丘である。

次に、前田利長の治世について検討する。



図3 前田利長の治世の寺院配置
(寛文七年金沢図 1673年)

利長は関ヶ原の戦後処理と徳川との関係の構築に奔走した。特に城下町整備に関して、加賀陣の危機に接した利長は城下町を囲む内惣構を1659（慶長4）年か

ら3年かけて整備した。利長の治世においても、整備の中心であった2つの河川の内側に寺院配置が行われることが多く、特に寺院が集積している様子は見られない。あえて寺院の建立が多くみられたところを指摘すると、利家の治世と同様で、小立野台地の崖下に配置された程度である（図3）。

4. 前田利常の治世

利常の治世では、1610（慶長15）年から始まった名古屋城の公儀普請と並行して、藤原一孝を中心に外惣構の整備が始まった。また、1616（元和2）年の軍役令により軍事特需をもたらした、城下の職人や商人に生産・商業の機会をもたらすこととなった。この時、利常は寺町の造成や野田桃雲寺の参道の整備、馬場の整備など街区整備を行い、城下町が拡大、一新された。

こうした城下町整備の背景を受けて寺院整備も前の2代とは大きく異なる動きをする。これまで最多の43の寺院が整備され、14ヶ寺院が城下町内で移転した。寺院跡地のうち6ヶ寺が待町に利用され、5ヶ寺が藩用地・御用地として召し上げられることとなった。移転した寺院の多くが、城下の中心部から郊外に移転していることから、利常によって行われた城下町において重要な外堀に囲まれた地域（内惣構）の再整備を行う過程で寺院移転が行われたと考えられる。また、1616年前後に移転した寺院が多いことも都市政策として利常がまとめて行ったことを示している。（表3）。

表3 移転寺院と跡地利用

| 寺院名 | 移転年 | 跡地利用 |
|-----|------|------|
| 岩倉寺 | 1630 | 待町 |
| 法円寺 | 1620 | 待町 |
| 瑞雲寺 | 利常頃 | 待町 |
| 光専寺 | 1615 | 待町 |
| 承證寺 | 1615 | 町人町 |
| 本長寺 | 1615 | 藩用地 |
| 西方寺 | 1615 | 不明 |
| 金剛寺 | 利常頃 | 御用地 |
| 常松寺 | 1635 | 藩用地 |
| 国泰寺 | 元和年中 | 待町 |
| 浄安寺 | 1616 | 御用地 |
| 松月寺 | 1616 | 御用地 |
| 妙典寺 | 1616 | 屋敷替 |
| 光覚寺 | 1635 | 待町 |

（『金沢古蹟志』をもとに筆者作成）

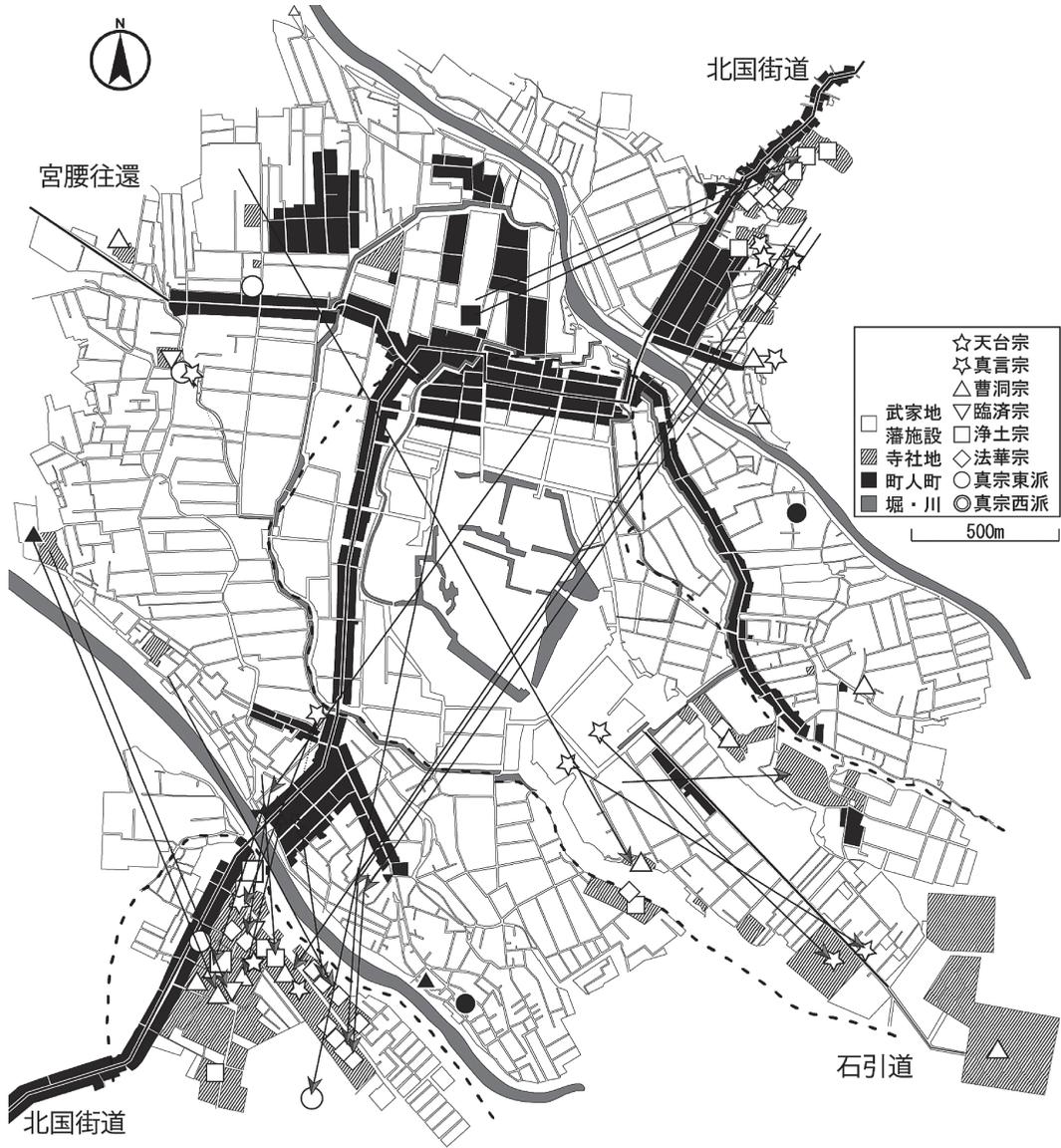


図4 前田利常の治世の寺院配置（寛文七年金沢図 1673年）
 * 移転前の地域までしか特定できなかった寺院は黒塗りで示している。

この時代には寺町寺院群と卯辰山寺院群の整備が行われた。寺町寺院群の寺院では次の3つの特徴が指摘される。①法華宗の寺院が多いこと、②河原町付近の寺院が移転することで寺町寺院群が整備されたこと、③街道を挟むように寺院群が整備されているわけではないこと（図4）である。

まず、法華宗の寺院であるが、特に利常の治世には法華宗の寺院が多く整備されていることが明らかとなった。特に犀川の河川に沿って列状に形成した場所

においては、卯辰山寺院群からも法華宗の寺院が移転していることから、寺院群の枠を超えて法華宗を集積させる意図が分かる。この移転によって卯辰山寺院群では、法華宗の寺院が3ヶ寺になり非常に数が少なくなっている。この法華宗の周辺では門前町は形成されることなく、門前町による賑わい創出を目指した施策とは考えにくい。

次に河原町付近の寺院移転についてみると、利常の特徴として自ら整備した寺院群を自ら移転させたこと

にある。火災による消失などで、過去に作られた寺院群が移転する事例は福井の西別院周辺や広島国泰寺周辺で確認できる。特に福井においては、内堀付近に位置していた広大な寺院を移転させ、その跡地を町人町に整備していた。その一方で、金沢の場合は藩の御用地や屋敷地として召し上げられる事例が多く、都市の再整備と捉えることができる。河原町周辺は、街道を囲む町人町が発達しており、こうした経済圏の発達を妨げないために広大な敷地を持つ寺院を寺町寺院群に移転させたと理解することができる。このことは大手町からの寺院移転とも共通する。また、こうした度重なる寺領変更からは藩主がかなり意図的に寺院の配置を変更できたことを示している。前田家が寺院に対し支配力を持っていたことが分かる。

最後に、寺院配置が街道を挟むように位置していないことである。河原町の寺院群も寺町寺院群もこの街道との関係から防御的機能を指摘されることが多かった。河原町に寺院が配置された絵図が残っていないため、河原町で行われた寺院配置は分からないが、少なくとも寺町寺院群は街道の入り口から離れるように配置されており、防御的機能を持たせるのであれば、街道から町人町を挟んだ外延部に位置すべきであると考えられるが、そのような配置にはなっていない。また、前述にあったように同時代に河原町から寺院が移転していることから、防御的観点を優先して配置したのであれば、このような移転が行われると考えることは妥当ではない。ほぼ同時代に整備された河原町の寺院群を移転し、防御機能を担う目的で寺町寺院群の整備が必要となるような事象は見当たらないため、城下町の拡大に伴う再整備と捉えることができる。

次に、卯辰山寺院群についてである。初期に城下町が形成された場所から寺院移転がいくつか見られている。そして、法華宗と浄土宗は特に固められて配置され、宗派ごとに整理されている。法華宗と浄土宗の寺院がそれぞれ固められて配置されている。これは寺町寺院群でも見られることであり、利常の宗派ごとに固めようとする意図が見える。これらの寺院は卯辰山と城下町の境に近い所に形成されており、城下町の最外延部と捉えることができる。

最後に小立野寺院群の整備についてであるが、内堀に近い場所に筋状に寺院群が形成されているが台地の崖下に位置しており、のちの時代に台地上に築かれる小立野寺院群の寺院群とは様子が異なる。台地上には郊外に藩主所縁の寺院が多数建立されているのが分かるが、それほど寺院数は多くなく、小立野寺院群の整備が行われるのは後の時代であった。

5. 前田綱紀の治世

綱紀は治世も長く（1645～1710）、1658（万治元）年と翌年の小松在住藩士の移動や1696（元禄9）年の兼六園の整備などが城下町の再整備行われた時期とも重なっている。特に保科正之の後見を得て新田開発・城下町整備を進めるなど文化振興に貢献した人物として知られている（金沢市、2005）。

綱紀の寺院配置を利常と比較すると次の2点があげられる。まず、移転した寺院を含めて非常に分散的である。具体的には寺院群の寺院配置について列状に配置し、特定の地域の寺院が移転していた利常に対し、そうした列の形成や特定の地域からの集中した移転は見られない。次に、小立野台地の台地上の寺院配置が行われるようになったことである（図5）。

寺町寺院群と卯辰山寺院群に関しては、既存の寺院を避けながら、寺院配置が行われている。具体的には、寺町寺院群では利常が整備を盛んに行った犀川沿いを離れ、街道に近い場所やさらに郊外へ寺院が配置されている。卯辰山寺院群でも街道から離れ卯辰山麓に位置している寺院も多数みられる。

その一方、寺町寺院群や卯辰山寺院群と比較すると寺院配置が遅れた小立野台地の台地上は、綱紀の治世に整備が盛んに行われるようになっていくことが分かる。その小立野寺院群では真宗寺院が多数移転させられた。この時代に移転した真宗寺院の多くが、侍町や町人町が広がる低地に位置しているもので、城下町の発展とともに郊外に移転されたものであると理解できる。冒頭にも触れたとおり、小立野寺院群は、天守と地続きになっている台地であり、防御的機能を持たせた広大な寺領を持つ寺院が配置されていると指摘されてきた。しかし、3つの寺院群の中でも成立が最も遅く、藩主とゆかりの深い寺院が多くみられることは防御的機能の指摘を支持するものではないと考える。小立野台地には侍町が広がっており、軍事機能が充実しているようにもみえるが、周囲より目線が高く、洪水のリスクが低い台地上に侍町が置かれることは、防御的意図よりも侍町を水害のリスクから守る意図の方が強いと考えられる。このことは、江戸城下町の山手と下町の間でも説明されており（篠田ほか、2004）、金沢城下の特別な防御的配置とは考えにくい。

この時代にも、以下のような寺院の郊外移転が見られる。犀川と浅野川に挟まれた地域は比較的城下町の整備が早く、町人町と侍町が広がっている地域であった。そこにみられた寺院は各寺院群に吸収されるか、堀の外側へ移転された。

移転した寺院については、1660年前後に移転した寺

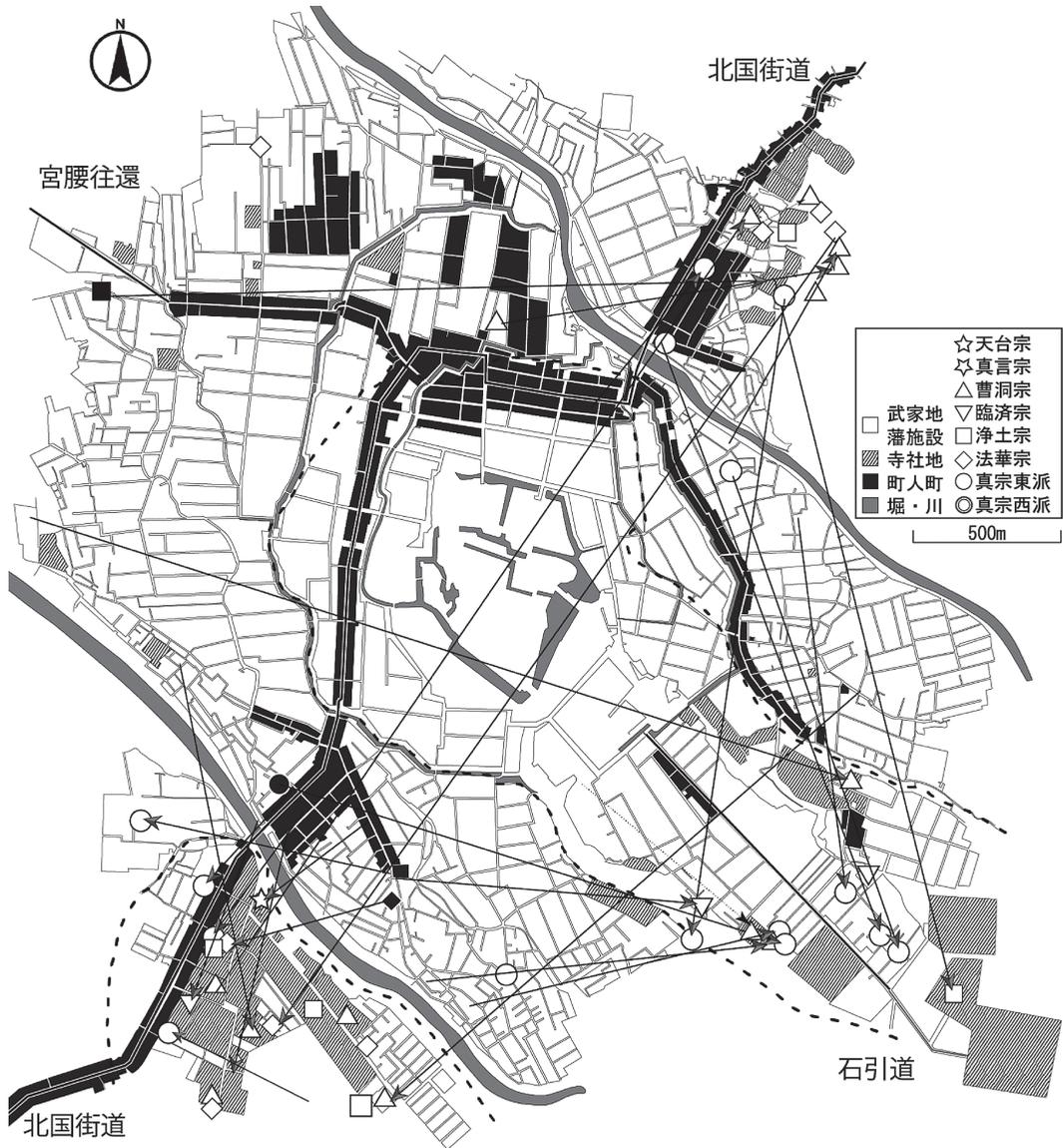


図5 前田綱紀の治世の寺院配置（寛文七年金沢図 1673年）
 * 移転前の地域までしか特定できなかった寺院は黒塗りで示している。

院が多い、これは1658（万治元）年と翌年の小松在住藩士の移動の時期とも重なっており、城下町居住者の移動に伴って、城下町を整備するとき寺院の移転も行われたと考えられる。跡地利用に関しては不明が多いが、これは移転前の寺院が置かれていた町名は分かっているものの、実際の場所は絵図がないため分からないものが多いためである。その一方で、利常の治世には御用地や藩用地となって移転した事例が多

くみられたが、この時期にはわずかになっている（表4）。

最後に、各寺院群の寺院について寺内町にみられる濠や土塁で囲まれるなど防衛的性格をもつ機構について確認したところ、現在ではそうした機構の痕跡は確認されなかった。

表4 移転寺院と跡地利用

| 寺院名 | 移転年 | 跡地利用 |
|-----|------|------|
| 棟岳寺 | 1649 | 侍町 |
| 慶恩寺 | 1658 | 藩用地 |
| 真行寺 | 1659 | 御用地 |
| 高源院 | 1659 | 侍町 |
| 仰西寺 | 1659 | 不明 |
| 如来寺 | 1662 | 不明 |
| 瑞光寺 | 1650 | 不明 |
| 瑞泉寺 | 1659 | 不明 |
| 願念寺 | 1659 | 不明 |
| 光専寺 | 1661 | 不明 |
| 薬王寺 | 1659 | 町人町 |
| 妙立寺 | 1659 | 侍町 |
| 少林寺 | 1646 | 不明 |
| 長久寺 | 1676 | 侍町 |
| 融山院 | 1667 | 不明 |
| 即願寺 | 1661 | 町人町 |
| 誓願寺 | 1670 | 藩用地 |
| 龍國寺 | 1659 | 侍町 |

(『金沢古蹟志』をもとに筆者作成)

6. 終わりに

本研究の成果として、以下の2点が指摘できる。

第1点は、卯辰山寺院群と寺町寺院群の2つの寺院群と小立野寺院群の間にはいくつかの違いがあった。前者は城下町整備の初期から寺院群として発達してきた経緯があるが、後者は綱紀の時代になってようやく整備されるようになり、それまではむしろ台地の崖下に寺院が多く集積されていた。このことは、従来指摘されてきた城下町の防御機能を担うという点では、小立野寺院群の成立はかなり遅く、防御機能の意図は薄いと考えられる。

第2点は、街道入口の寺院集積地の役割に関する指摘である。河原町は街道の入口で防御的機能を担っていたと指摘されていたが、整備後すぐに寺町寺院群へと移転していた。利常の治世において急に防御的機能を解除するべき事象は確認されなかった。つまり、これは城下町の都市計画と実態のずれが生じたために起きた再開発と考える方が自然である。河原町の寺院を受け入れる形で寺町寺院群は発達したが、移転先は犀川に面した街道から離れた場所であり、街道からの侵入に対する防御機能を持たせるには不適切な場所である。綱紀の治世で指摘したが、寺町寺院群が街道の近くに寺院が整備されるのは後の時代である。このこと

から、河原町の防御的機能を寺町寺院群に移管したとは考えにくく、特定の宗派を固めていることから宗教勢力の管理のしやすさを重視した都市計画であると考えられる。

本研究では、藩主の治世別に寺院配置を見ることで、寺院群の成立時期のずれや、防御的な観点から考えた際の矛盾点などを指摘することができた。一方で、それに代わる寺院配置の論理を明らかにするには及んでいない。

【注】

- (1) 本研究では寺院が集まっている地域を寺院集積地と表現し、「寺町」は地名の場合のみ使用する。また、金沢城下町では3つある寺院集積地を「金沢三寺院群」と一般的に表現されるため、当該寺院集積地については寺院群と表現する。

【参考文献】

- 石川県『石川県史第二編』石川県図書館協会、1974再刊。
伊藤毅『近世都市と寺院』『日本の近世9』中央公論社、1992。
今川朱美・小田雄司「城下町の形成と街道網の関係—広島を事例として—」、2010、広島工業大学紀要研究編、44、pp.41-45
小野晃司「近世都市の発達」『岩波講座日本歴史』、岩波書店、1934。
金沢市史編さん委員会『金沢市史 通史編2』、金沢市、2005。
木越隆三「金沢城と小立野寺院群—寺院配置論を再考する—」金沢城研究、石川県金沢城調査研究所、2018、pp.1-28
篠田明恵、福井恒明、中井祐、篠原修中「江戸城下町における神社の配置とその傾向」、土木史研究、23、2004、pp.157-164
西和子「織豊期城下町にみる町割プランの変容—タテ町型からヨコ町型への変化について—」、歴史地理学、45-2 (213)、2003、pp.25-46
原田伴彦「近世都市と寺町」『日本歴史の構造と展開』山川出版社、1983。
松本四郎『城下町』吉川弘文館、2013。
松本豊寿『城下町の歴史地理学的研究 増訂版』、吉川弘文館、1967。
田中喜男「城下町の成立・変容」『伝統都市の空間論・金沢』弘詢社、1977。
矢守一彦『城下町のかたち』、筑摩書房、1988。
(主指導教員 由井義通)